

前回シンポジウムまとめ

ネオ・プラグマティズムの現在

大河内 泰樹（一橋大学）

古くからの会員の方々は、一哲学会のシンポジウムのテーマに今回「プラグマティズム」が取り上げられたことに驚かれるかもしれない。たしかに、一橋の哲学・社会思想では従来よりドイツ、フランスという大陸系が中心で、プラグマティズム、分析哲学といったいわゆる「英米哲学」を専門とする人はいなかったわけではないが、少数であった。そうしたなか、2011年より島崎先生の後任として分析哲学・科学哲学を専門とする井頭昌彦先生が教鞭を執られることになり、すでに分析哲学研究の一拠点となつつある。（おそれながら今回のシンポジウムはその井頭先生の「お披露目」の意味合いもあったといつていいとおもう。）さらにまた、今回テーマとした「ネオ・プラグマティズム」は大陸哲学と無関係ではない。むしろ、この潮流に数え入れることのできる最近の論者の中では、ヘーゲルをはじめとする大陸哲学の再評価が進んでおり、「英米哲学」と「大陸哲学」の融合が進んでいるといえる。つまり、一橋の哲学・社会思想というきわめて内輪の事情としても、哲学的な大局から見ても、じつはきわめて時宜を得たテーマだったと言っていいだろう。

今回、この「ネオ・プラグマティズムの現在」というテーマでシンポジウムを開催するにあたり、いち早くローティエを日本に紹介し、またこれにとどまらずネオ・プラグマティズムを基礎とした独自の哲学を展開している野家啓一先生（東北大学名誉教授）に登壇をお願いしたところ、幸いにもご快諾いただいた。野家先生は井頭先生の *Doktorvater* でもある訳だが、比較的若手のわれわれ二人で、いわば野家先生の胸を借りて、このテーマについて取り組んでみようとしたわけである。野家先生のお名前の効果もあってか、幸い当日は学内外から多くの聴衆にお集まりいただくことができた。（本シンポジウムに先立って、昼休みにはプラグマティズムの歴史の概要を紹介するランチレクチャーを井頭先生がおこなった。これによって聴衆のシンポジウムの内容についての理解が大いに進んだように思われる。本学会の新たな試みとして言及しておきたい。）

トップバッターをお願いした野家先生の報告「「反自然主義」としてのネオ・プラグマティズム」は、二つのドグマ（「分析的真理と総合的真理の区別」および「直接的経験への還元主義」）を批判したクワインのプラグマティズムが、自然主義を帰結しないポテンシャルを持っていたにもかかわらず、クワイン自身は自然主義・物理主義を採用することになったことを批判的に検討しながら、セラーズが提起した規範の問題をローティエが継承しながら、自然主義を批判したこと、またパトナムが同様に規範の必要性から「自然化」を批判したことを紹介し、狭義の自然主義ではない立場としてネオ・プラグマティ

ズムを特徴付けるとともに、最後にパースへの還帰を訴えた。大河内は「知識の社会性と科学批判-ブランダム、ハーバーマス、ヘーゲル」というタイトルのもと、そもそも批判理論においてホルクハイマーの伝統的理論批判が、ホーリズムの発想を含んでいたこと、さらにブランダムとハーバーマスの語用論を比較しながら、ブランダムのネオ・プラグマティズムにおける合理性理解がヘーゲル的な歴史概念を要求するものであること、そこにホーリズムを踏まえたヘーゲル的な科学批判の契機を見出すことができること指摘した。井頭先生の報告「Pragmatic Naturalism / Sydney Plan とその課題」は、最近注目を集めているプラグマティスト、ヒュー・プライスの Pragmatic Naturalism を紹介し、この立場が含んでいる「形而上学的静寂主義」の立場は、とくに道徳的価値や心といった物理的対象物を持たない言説についても真理性を認めるものであり、基本的に大変説得的ではあるが、哲学の課題を人類学的系譜学的記述に還元してしまう点で規範をも扱いうる哲学のタスクについて誤った理解をしているとおもわれる点、また十分な論証が為されていない点について問題点が指摘された。

討議の中では、ネオ・プラグマティズムの有効性が、井頭先生の報告のことばで言えば「一階の真理性」を認め、メタレベルの問いを無効と考える点、しかしそこでも規範が問題となりうること、あるいは規範こそが主要な主題となるべきであるという点については確認できたように思う。また、「自然主義」の評価に関しても、井頭先生のいう「ミニマルな自然主義」が野家先生の「反自然主義」としてのネオ・プラグマティズムという立場と齟齬するものではないことが確認された。他方、当初目指されていて、ネオ・プラグマティズムにおける大陸哲学の受容という論点については十分に展開されなかったように思う。むろんこれは司会者であり、この部分の報告を担当した筆者の能力不足によるものである。

以上のような反省点もあるとはいえ、本シンポジウムの企画者としては、分野を超えて共有できる部分が多かった点に心強さを覚えるとともに、今後の課題について問題点を整理することができ、大変有意義なシンポジウムであった。登壇いただいた両先生、とくにお忙しい中遠方よりお越しいただき、ご報告いただいた野家先生に感謝申し上げます。